



® 平成 31 年 4 月 3 日 (水)

No. 14904 1部370円(税込み)

発行所

一般財団法人 経済産業調査会

東京都中央区銀座2-8-9 (木挽館銀座ビル)

郵便番号 104-0061

[電話] 03-3535-3052

[FAX] 03-3567-4671

近畿本部 〒540-0012 大阪市中央区谷町1-7-4

(MF天満橋ビル8階) [電話] 06-6941-8971

経済産業調査会ホームページ <http://www.chosakai.or.jp/>

特許ニュースは

- 知的財産中心の法律、判決、行政および技術開発、技術予測等の専門情報紙です。

定期購読料 1カ年61,560円 6カ月32,400円
(税込み・配送料実費)

本紙内容の全部又は一部の無断複写・複製・転載及び
入力を禁じます(著作権法上の例外を除きます)。

目次

☆成長戦略に必要な経営理論《知財版》⑥… (1)

成長戦略に必要な経営理論《知財版》⑥

知財と格差

(その1:格差を作るのも知財、格差を埋めるのも知財)

正林国際特許商標事務所

所長弁理士 正林 真之

1. はじめに —知財と勉強—

「知財」というものについては色々な見方や考え方があるが、実は「知財」というのは、「勉強」とよく似ていたりする。知財にしろ、勉強にしろ、それが人間であったとしても、企業であったとしても、生まれたばかりのときには必要はないが、成長するにつれ、絶対に必要なときがやってくる。特にこれから羽ばたこうとするときには必須となり、しっかり

とやっていたいなかった者は、その後に何かと困難に出会うことになる。

これに関して言うと、「将来に、絶対必要だから」と言われてもピンとこず、そこで「やる」か「やらないか」によって、将来大きな差が出てしまう。もちろん、後になって「あの時しっかりとやっておけばよかった」と思うのも、これまた知財も勉強も同じである。



知的財産ビジネス支援の専門職集団

特許業務法人

太陽国際特許事務所

所長・弁理士・博士(工学) 中島 淳

【機械建築担当弁理士】
福田 浩志(副所長)
福武 史郎*
堀江 千英*
坂手 英博*
針間 成成*
永田 淳一*
高橋 尚元*
河野 英明*
内田 和敬*
中村 優子*
江口 敏範*
御橋 正博*
上野 孝治*
本倉 直樹*

加藤 雅嗣
大塚 映美也*
横山 秀理*
伯田 三規*
佐田 広洋*
三島 博道*
長谷川 博英*
川口 慎茂*
黒田 直仁*
北島 愛*
中野 直之*
佐野 村野*
村野 鈴木*
福尾 篤将*
尾口 崇晴*
中島 憲太郎*
小幡 義之

【電気電子担当弁理士】
加藤 和祥(副所長)
百瀬 尚幸*
瀬濃 好美*
佐久間 顕治*
小早川 佳子*
山口 真紀*
大崎 奈季*
山崎 明和*
島山 大幸*
小田 安明*
中田 達也*
藤原 雄一*
巖崎 尾太*
藤原 健規*
藤原 正樹*
後藤 進一*
八田 進一

【化学材料担当弁理士】
西元 勝一*
下由紀子*
上田津美*
小林 美貴*
設楽 修*
西山 崇*
早瀬 貴介*
長野 恒夫*
前嶋 昌大*
有村 和貴*
上原 知也*
宮崎 智史*
松村 宏紀*
立花 喜美江*
小倉 あい

【バイオ医薬担当弁理士】
山極 美穂*
渡邊 裕子*
中川 彰子*
村尾 招子*
桐内 優*
宮澤 優子*
森 知愛*
土井 徹也

【米国特許弁理士】
シェルドン・モス
チャド・ヘリング
【中国弁理士】
董 昭
【韓国弁理士】
金 峻河
【弁理士】
中野 浩和

*特定侵害訴訟代理業務付記

東京本部: 〒160-0022 東京都新宿区新宿4丁目3番17号
電話 (03) 3357-5171 (代表) ファクシミリ (03) 3357-5180 (代表)
<http://www.taiyo-nk.co.jp> 相談・連絡用E-mail: info@taiyo-nk.co.jp
横浜ランチ: 横浜市 USオフィス: 米国バージニア州

更に言えば、勉強の成果によって格差が生まれるのと同様、知財の成果によって格差が生じる。それに対処するためには、ある程度の量をノルマ的にこなす必要も出てくる。ただ、ある程度の量は絶対に必要なのであるが、ただやみくもに量をこなせば成果が出るというものではないという点も、知財と勉強の両方に通ずるものがある。

ここで、「何のために勉強をするのか?!」と大人たちに聞いてくる子供と同様、「何のために特許を取るのか?!」という問いは、弁理士として何度も聞いてきた。そう、「一般生活で使わない数学を、どうして一生懸命に勉強しなければならないのか?!」。この問いに対して明確に答えられる大人がそう多くないのと同様に、ことに中小企業の社長あたりから「何のために特許を取るのか?!」という問に的確に答えられない弁理士というのは、意外に多いものである¹。

ところで、この世の中には、確かに、勉強が必要のない者も居る。そういった者たちにとっては、学校で過ごす時間は全くの無駄である。算数の授業であろうと、数学の授業であろうと、それらに興味を持てないというのではない。それらは彼らにとっては、全くの“無駄”なのだ。例えば、とある田舎で、そのまま生まれ、そこから出ずに、ただ暮らしていくとする。外国人とも接することは、一切無い。そうしてそのままその地で死んでいく。そんな者に対して、一生使うことが無いであろう英語を勉強することなど、全くの無駄である。

ところが、もし田舎に生まれたとしても、そこから出て一旗揚げようとか、そこまでの野望は無いにしても、その町以外のところで仕事をしようとか、あるいは、そこまで思わなくとも、その町の周囲の人間よりは良い暮らしをしたいと思ったのであれば、それ相応の勉強と努力が必要になる。ただ、「勉強が必要になる」とは言っても、志した最初の時点では、いったい何の勉強をしたらよいものが全く分からない。なので、とりあえずはそこらにある書物を読んで、自分が今まで知らなかった知識を貪欲に得ることから始まる。そう、そもそも「変わろう」とか、「より良くなろう」とかしないのであれば、そもそも勉強など不要なのだ。けれども、もし「変わろう」とか「より良くなろう」とか志したのであれば、

その途端に、勉強というものが必要になってくるのである。

では、知財のほうは、どうか。そう、これは全くのところ勉強と同じで、「変わろう」とか「より良くなろう」とかいうことと全く無関係な会社や個人にとっては、無用の長物である。例えば、ローカルな産業（例えば、地域のバス会社やタクシー会社のようなもの）で、そこから外に出ることも無ければ、外部からの参入も無いようなところ。そんなところでは、いかに地域と密着しているかだけが重要なのであり、知財戦略を練る必要など、何もないだろう。

つまり、これまた繰り返になってしまうが、ローカルなところで、ローカルなまま、そこからの発展を何も考えない企業においては、知財はほぼ不要な長物なのである。けれども、ローカルを超えた発展を志す企業においては、知財を考えることが必須となる。そしてまた、これまた「知財が先か、それとも意志が先か」の話にはなるが、知財に取り組んでみると、なぜかローカルを超えた発展に目が行くようになるものである²。

このように、勉強に目覚めて勉強をどのようにしていくかで格差が生まれて拡大していくのと同様に、知財に目覚めるかどうかで格差が生まれ、更に知財の量と質、そしてその取組み姿勢によって、格差が拡大していくことになるのである。

2. 「地域密着型」という名の現状維持企業

地域のバス会社やタクシー会社のようなローカルな産業で、そこから外に出ることも無ければ、外部からの参入も無いようなところでは、いかに地域と密着しているかだけが重要なのであり、知財戦略を練る必要など、何もない。そしてまた、ローカルのタクシー会社なりバス会社なりで、他に進出する可能性も意思も無いのであれば、それらの運転手は、そこに就職してから、日々、決められたルートをひたすらに運転し続け、それで一生を終える。会社の事業範囲や営業エリアが大きくなることも無いのだから、「今度、ここのエリアもウチの会社の営業エリアになったから、今度はここのところの路線の運転手もやってくれ」というようなことなど無く、ただひたすらに同じところを走ることになる。

こういった会社に勤めたとしたならば、当然のこ